

## 「学級崩壊の予防と対応」河村茂雄（都留文科大）

02,5,27 於）県総合教育センター

記録：やまちゃん

### 学級崩壊から学ぶ～2つのパターンの学級崩壊～

子どもが変わった。・・・自然に学ぶことが少なくなった。

あきっぱく，がまんができない。

傷つくこと，失敗することをおそれる。したがって，食わず嫌いである。

欲求充足思考で，おもしろくないことはしない。

対人関係を自ら形成できる子どもが少ない。形成しようという意欲も少ない。

個人的な躰ができていない，集団生活のマナーを理解していない。

うぬぼれが強く，自己主張的である。

他人の気持ちを察することができない。

しゃべる内容は大人だが，心はとても幼い。

周りに流されやすい。ことの善悪よりも多数派につく。

知識と具体的な行動が一致していない。

#### 学級集団の目的地・・・これからの学級経営のあり方

・教師が学級の子どもたちに一定の知識や社会性を効率的に学習させるために必要な学級集団から、子ども一人一人を育てるために学級集団の育成へ。これからの学級経営は、子どもたちの人間教育を学級集団を活用して、計画的に推進するためにストラテジーの側面が重要になってきた。

人は緊張が少なく、あるがままの自分でいられる居場所となる集団に属することで、心が癒され、生きていく活力が喚起される。そして、そのような集団での生活体験を通して、社会性や人間関係の持ち方、自己の確立、現実判断能力、道徳心などを自然に学んでいく。

・30～40年前の子どもに比べると，知能も情緒的な安定も今の方が上である。ではなぜ変わったように見えるか。それは環境（社会）が変わったからである。今の子は昔，「金持ちけんかせず」といったときの子どもたちに似ている。今の子は豊か。豊かだと人に関わらない。小さなトラブルには関わらない。傷つくことはいやな子どもが多い。一人っこだ多いから，応援する大人はいっぱい（父，母，祖父母）いる。食事も子供が中心。すると子どもは自己愛が強くなる。そして，トラブル，マイナスの感情を避けるようになる。そうすることによって精神の安定を図る。

・深い人間関係，粘っこい人間関係は疲れるので避ける。つまり，自己中心的になっ

ている。子どもたちの関係が希薄化しているのは結果としてそうなっているだけである。つまり3, 4人でグループ化している。人間関係は疲れるけど、寂しいからグループを作っていつでも一緒にいる。3, 4人の中でストレスの発散はするが、どう生きていくか、など核心的なことは言わない。

・1991年は教育史上重要な年である。なぜならバブルが崩壊した年であり、文部省が「不登校は誰にでもおこる」と発表した年だからである。子どもたちは、人とつきあうのが苦手、集団生活が苦手、つまり、学級集団そのものを形成できなくなっているということである。「匿名性」(学級の中で人の陰に隠れ、いてもいなくてもわからないような生徒の状態)が大きくなったら危険。つまり、学級と自分の関わりを無視し、こいつらと自分は関係ないと生徒が思うようになったら学級は崩壊する。

・日本人・・・コミュニケーション能力が低い。自分の意見をはっきりいう人が嫌われる。

それでもコミュニケーションが成立してきたのは、相手の気持ちを察する能力が高いからである。おばあさんは知り合いに会うといつも同じことを聞く。それはコミュニケーションをとるためのルール(儀式)であった。つまり、そのことから話を始めましょうということである。察すること、コミュニケーションの雛形の上に成り立っていた。

・現代社会を考えると、企業で不適応を起こしているのは圧倒的に50代が多い。それは何も言わなくても察する日本古来の伝統に乗っ取っていたからである。昔は黙っていても座っていれば後輩がお茶を出してくれた。でも、今は自己主張しないと相手は何もしてくれない。お茶がほしいならほしいと言わなくては後輩は理解してくれない。

・このままでいくと寂しいことになる。現代っ子は友達とうまく遊べなかったら、機械で補う。ファミコン、ゲームがそうである。機械は自分に主導権がある。機械は自己中心的な人には最高のものとなる。現代の子どもたちは対人関係の希薄化を機械で補っている。機械を支配しているつもりで、実は依存している。この関係の中で心の安定を図っている。職安に行く学生に聞くとやりたいことより、条件に合うことを探している。自分が何をやりたいかわからなくなっている。自己が確立していない。自分探しをするために外に行く学生がいるが、自己の確立は自分の内側から作り上げていくもの。また、自己の確立のためには相互性が必要。相手の反応によって自分を知る。そして、かなりの量の対人関係が必要である。

・学級崩壊を防ぐためには学級解体をすればいい。東京のある学校では、ホームルームでも全て単位制、選択制。ポイントがたまると卒業。でたくないホームルームはない。その出身者は最初天国だと思ったそうである。中学校ではいじめられていた生徒がいた。その学校では勉強も好きなことだけ何でもできた。でも、自分が学校を休んでも気にする人はいなかった。早稲田大学に入っても誰も喜んでくれなかった。つまり、対人関係を学び忘れたということになる。知識だけなら学校はいらない。現代は、対人関係の中で知識を獲得していく時代である。そうでないと学校の価値はなくなる。

## 学級崩壊の2パターン

・8割・・・反抗型。担任が従来、管理的なやり方を押しつけようとして崩壊する。たとえば昔のいい母親のパターン・・・洗い物でも片付けでも、母親が先頭にたってやって見せて、子どもが気づくのを待つやり方。そして、やってくれと言わないがやってくれたらほめるやり方。これが7, 80年代の教育。ところが、現代は、母親がやっけていても、やっけてくれていることに気づかないし、ありがたみも感じないから、つい母親は怒る。するとそれに対して、子どもは反抗する。

・2割・・・不成立型。子どもたちが集団にならないまま拡散してしまう型。ある私立高校の例。一クラス70人いる高校。どう考えても多すぎるが、どんどんやめていくので2学期が始まるころにはちょうど良くなっている。。クラスメートは誰がやめても気にしない。

・2年間系統的に学級経営をしたクラスは2年目にぐっと集団の状態があがっていく。ただし、そうできる先生は3割。そうでないのが7割。うまくできないなら1年限りの方がいいということになる。

## 教師のあり方

### 学級集団を育成する計画的な対応が必要

・対人関係をうまくできないから先生が助けてやらなければいけない。そのイメージは3歳児にブランコを教えるのに似ている。最初に「ガツン」とやって失敗させてしまったら子どもはもうしたくなくなる。逆に対人関係の良さに気づいたら苦しくても求めるようになる。

・きっかけとかやり方を教えられたら話したい。自己愛は強いが逆に、強いから傷つかないならやるし、傷ついたらやらない。今の子にあったやり方をやるしかない。自分というものが少ない現代っ子の特徴は、自分が選択しない、ほかの子に合わせていくというもの。よい方向でも悪い方向でも他に合わせていく。**だから、3, 40人集まったらどんな傾向にある生徒かをつかんであったやり方をする。リーダーがいらないなら、それを作ることから始める。おこったり、嘆いても仕方がない。**しかし、それを読めない先生、わかりたくない先生が多くなる。いずれ何とかなるだろうと思ってしまうのである。人間は、どうしようもない事態が起こったとき、問題を先送りする傾向にある。どうしようもない状態とは、子どものみならず、親との関係も冷たくなり、修復不可能の場合などのことである。学級崩壊といっても、突然崩壊することはない、冷たい期間、集団を読みとらないと手遅れになる。

### 学級状況をつかむことの必要性

・学級崩壊は何れ秋田などの地方にもやってくる。なぜ、今、学級崩壊が起きていないかという、人口移動が少ないからである。また、昔の「察する」やり方が通じているからである。

・同じ学校内で、生徒の親が互いに相手を訴えるような状態になっているところもある。また、学習権を侵害されたと訴えるところもある。集団が逆回転してしまったら

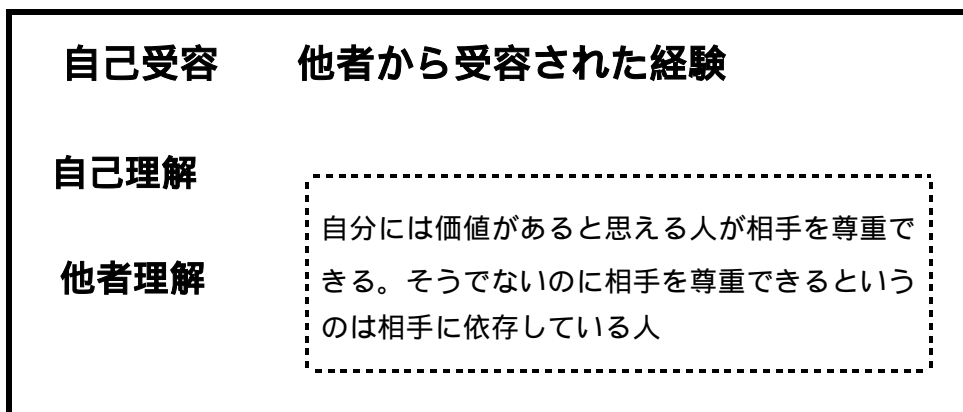
回転を戻すのは苦しい。一人一人がいい子でも集団に巻き込まれてしまう。人は学級生活を通して人間関係を学ぶが、プラス面だけでなくマイナス面も学んでしまう。崩壊してくると、陰口がでる。早く帰ると何を言われているかわからないから早く帰れなくなってしまう。すると集団を信頼できなくなる。つまり、人間関係のマイナスも学んでいるということである。

・学級の中に問題が起こったとき、担任は知らなかった、わからなかったと言うことが多い。でも「わからない」はもう通用しない。人間の健康診断と同じように学級状態もその時々で変化しているから学級の状態をある程度知っておく必要がある。そこで作ったのがQ-Uという調査法である。子どもが傷つかないものを開発した。実施時間は10分。Q-Uだと、個人がつかめる。集団がつかめる。個人と集団の関係をつかめる。また、不登校、いじめを察知できる。

・中1の6月、危ないところにある生徒の8割が不登校になった。生徒は自分がいじめられていることを言うと言自己肯定感が少なくなるので絶対言わない。Q-Uでは潜在意識をつかまえるのがねらいである。

・集団に存在するための最低限の条件とは安全欲求が満たされていること。被侵害得点が高いのは学校に行くのがつらい場合である。喜びがないと積極的に学校に行かない。つまり、認められている、できているという気持ち・・・承認欲求。不満足群の8割が不登校になっているから、これを見つけ行動化する前に対応しようというもの。非承認群・・・影の薄い子。侵害行為認知群・・・人とうまくやれない、がんばればそれだけトラブルが起きる子。1次対応は、表面的な配慮でOK、2次対応は、全体の前で配慮が必要。3次対応は、個別に配慮が必要。不満足群6割を越えたクラスは崩壊しているといえる。

## 自己受容について



これを理解しないで集団の凝集性を高めようとするればスケープゴートが出る。また、教師自身も自己受容ができないと生徒を受容できない、自己受容できない教師は皮肉屋が多いといわれる。

## 心の教育について

特定のときに行うものではない。

・昔の生徒指導主任は「これはダメ」というが、ときには「立場として良いとは言えないが・・・気持ちはわかる」と、役割を捨てていえたもの。

・担任は場合に応じて、S G E のリーダーとして生徒に接したり、教えるべき時には教えたりしていくことが大事。

グループエンカウンターをやれないクラスもある。やれる、やれないはどこで判断するか。経験でも判断できるが、Q - U等で客観的に状況をつかむことも大事。そして、心配なときは手を打つことが必要。それができなければやるべきではない。(やり終わったときだれかにきついことを言われて、もう二度とやりたくないと言われたら失敗)

自分の思いより、子どもがどう思ったか、聞く必要がある。フィードバックして考える癖を付けたい。

学級崩壊が起きると、みんなで何とかしようというより、最終的に責任を押しつける形になりやすい。そして、責任を押しつける先が担任の先生ということになりやすい。しかし、対人関係を育てるのは学級集団においてである。それゆえに、教師は、具体的な手だてをもつ必要がある。